令和４年 12 月 24 日発行

千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会 広報紙

ちば発

第46号

暮らしを拓く

INTERVIEW

入居者の思いを汲み、寄り添い、思いを実現できるグループホームを

男女共同参画と災害･復興ネットワーク代表
女子刑務所のあり方研究委員会委員長
法務省再犯防止推進計画等検討委員会委員

堂本暁子さん

千葉県単独事業である障害者グループホーム等支援事業は 2005 年（H17）に開始され、2011 年（H23）からは「グループホームの量的拡充、質的向上」を指針としてきました。皆様のご尽力により量的拡充は順調に進んでおります。多様な事業所が急増する今、グループホームの原点に立ち返り、更なる「質的向上」を目指すため、この支援事業を創設された堂本暁子さんに、当時のお話をお伺いしました。

私が知事を務めたのは 2001 年（H13）４月から 2009 年（H21）４月までです。私の基本は「トップダウンではなく、ボトムアップ。市民の発想を普遍化する」という逆転の発想です。国会議員時に成立に関わったＮＰＯ法を活用し、ＮＰＯを増やすために始めたタウンミーティングは「白紙の段階から考える」を実行しました。これは、その後千葉方式と言われ、他の分野でも政策形成の方法となり、特に障がい者や高齢者など当事者が白紙から意見を述べ、政策を作り上げていく方式は「健康福祉千葉方式」となりました。

福祉行政を進める中で「理不尽な理由で、辛く悲しい思いをしている人はいないか」が最も重要なキーワードになり、縦割りをやめ、子どもも高齢者も、障がい者も互いに認め合い、力を出し合い、自分らしく暮らせる地域を創るという発想が生まれ「ブレーメン・プロジェクト」になりました。

その流れが 2004 年（H16）「第３次千葉県地域福祉支援計画」の基本の福祉像となります。「①誰もが ②ありのままに・その人らしく　③地域でくらすことのできる」ですね。この時「重度・重複障害者・医療的ケアの必要な障がい者が利用できるグループホームの創設を検討する。グループホームを支援する支援ワーカーを置く」ことも発表していますが、これは全てタウンミーティングで市民から提案されたことです。ご本人や親御さんからです。

10 月には県単独事業・中核地域生活支援センターを開設し、24 時間・365 日誰でも相談できる仕組みを作ります。相談員が携帯電話１本でできる支援、ワンストップの支援です。行政ではできないきめ細かな対応ができるため、県民には歓迎されました。

2005 年（H17）に県庁内に「障害者グループホームのありかた研究会」をつくりました。そこから出た提言には「入居者のニーズがどこにあるか、が最も重要な視点。支援者はそれをどう実現していくかを念頭においた支援を」「適切なケアのためには関係者の研修が必要」等が書かれています。これはとても重要な点ですね。

そして 10 月、6 圏域に障害者グループホーム等支援ワーカーを配置しました。
　さらに翌年 2006 年（H18）に、全国初の障がい者に対する差別をなくす条例「障害のある人も、共に暮らしやすい千葉県条例」を提案、満場一致で可決、成立しました。これも当事者からの要望で作られたものです。「施設から出て、町で暮らす、グループホームで暮らす」というのは友人の元宮城県知事浅野史郎さんが、厚生省障害福祉課長時代に進めた政策です。誰もが、ありのままに、その人らしく地域で暮らすために、グループホームは重要な場所です。入居者の思いを汲み、寄り添い、思いを実現させることのできるグループホームが増えることを、望んでいます。

　今年 90 歳となる堂本さんは、昨年 11 月「声なき女性たちの訴え女子刑務所から見る日本社会」（小学館）を出版されました。知事を退任された 2012 年から取り組まれてきたテーマです。「堂本さんの尽きないエネルギーの源はなんでしょうか？」との質問に、「目の前にきたことに対処してきただけ。もちろん一人でではなく、皆で、ですが」と、きっぱり。お元気です。

　　インタビュアー及び記事
　　石塚友子（前習志野圏域障害者グループホーム等支援ワーカー、社会福祉法人福祉共生会　業務執行理事）

2023
1/10(火)

千葉県障害者グループホーム等連絡協議会

ホームページはじめます。

【URL】　https://chibaghw.org

第 48 回千葉県障害者グループホーム講座　報告
グループホームを終の棲家に～入居者の 65 歳以降を考える～

　9 月 30 日にオンラインにて、第 48 回千葉県障害者グループホーム講座をおこないました。 「グループホームを終の棲家に～入居者の 65 歳以降を考える～」をテーマに、社会福祉法人薄光会の井上利昭様より実際の事例を基にご講演をいただきました。93 名の受講申し込みがあり、講演後は活発な意見交換もなされました。
　高齢化に伴い身体的・精神的な課題が増え、「グループホームでの生活を継続できるのか」という大きな課題に直面したという事例でしたが入居者さんやご家族のニーズに応じて障害福祉サービスと介護保険サービスを併用し、グループホームでの生活を続けられました。行政、医療、介護施設との連携、グループホームの環境調整、スタッフのスキルアップなど入居者さんの生活を支えるために必要なものをオーダーメイドし、人生の最期まで寄り添って支えたお話でした。
　受講者からは「同じような課題に悩んでいたがイメージが持てた」「自分たちなりの“終の棲家”を目指したい」という声があり、高齢化の課題に向き合っていく後押しとなったようです。高齢化に伴う課題は多いですが、グループホームが当たり前に“終の棲家”となる未来を期待したいなと思います。

みてみて！マイホーム！

医療的ケアが必要な利用者さんのためのグループホームを創りたい！

（香取市）

香取圏域自慢のグループホーム「メイプル」（介護サービス包括型）へ訪問させていただきました。

「医療的ケアが必要な利用者さんのためのグループホームを創りたい」という思いから訪問看護を行っている合同会社 NEXT は令和 3 年 10 月に「メイプル」を開設したと伺いました。

定員は 5 名、現在の入居者は 3 名。20 代から 30 代の男女で交通事故被害者など、高次脳機能障害で日々ベッドの上で過ごし、気管切開や胃ろう・経管栄養の方が入居対象となっています。一般的なグループホームとは異なり中央にホールを配置、常に居室の利用者さんに対応できる体制がとられております。また、喀痰吸引研修を終えた介護福祉士や看護師が職員として常駐する体制が取られています。おひとりお一人の利用者さんにきちんと対応できるよう、入居のペースは半年に 1 人。全職員が利用者さんを理解できるよう細かなアセスメントを取り、支援の統一が行われています。

日頃ベッド上で過ごす利用者さんを居室だけでなく、ベッドごとホールに出てもらったり、天気の良い日はホールからウッドデッキに移動していただき、季節の移ろいを感じていただいています。

近隣の小学校の生徒さんから利用者さんに向けて描かれた絵がホールに飾ってあったり、コロナ禍で出来ていなかった近隣の方との交流を今後行っていきたいとのことでした。

医療の進歩により守られる命が増えてきました。しかし治療を終えた後の居場所は入院の継続や、高齢者住宅での生活など、国の制度として整っていないのが現実です。「メイプル」では、その人らしさに着目し、毎日来る訪問リハビリの職員 2 人体制で立位を取ることが困難で日頃は導尿を行っている利用者さんに対しても、トイレでの排泄を試みたり、会話が出来なく意思決定が難しい利用者さんに対しても、出来る限り体動から意志の表現の確認を行っています。

家　賃	40,000 円	水光熱費	実 費
食　費	0 円	日用品費	5,000 円

医療物品管理費・・・その方の医療行為によって 5,000 円～10,000 円
その他実費・・・・・お出かけなどは旅費をいただいています。

き　ど　あい　らく

起努逢楽

『起業する努力、出逢いがあって楽になる』
障害者グループホーム等支援ワーカーは
新規開設のお手伝いをします！また開設後の
応援もしています！

海匝圏域の障害者グループホーム等支援ワーカー（以下、支援ワーカー）に就き、2 年目になりました。私は今年で社会人 3 年目であり、経験も知識もない中で支援ワーカーという立場で皆様と関わらせていただいております。自分の無力さに申し訳なさを感じながらも、グループホーム（以下、GH）事業所の皆様、関係機関の皆様、関わる全ての皆様から温かいお言葉やご指導を頂き、今日まで業務を行えております。皆様には感謝してもしきれません。

振り返ると、着任直後は「GH ってなんだ？」というところから始まりました。生活の場として、当時の私が考えられたのは施設か自宅で生活をする 2 つの選択肢のみであり、障がい者が施設でもなく、自宅で暮らすでもなく『地域の GH で暮らしていくこと』を考えることは、お恥ずかしながら無かったと思います。制度を知り、業務内容、海匝圏域の状況を引き継ぐ中で、支援ワーカーの役割の一つとして「GH と入居希望者を繋ぐ架け橋のような役割だ」という話を聞きました。障がい者が生活をしていくために、地域全体で本人を支えていくことのお手伝いができると知ったとき、わくわくしたことを思い出します。

様々な入居希望者とお会いしていく中で、それぞれの事情はありながらも多く共通していると感じたことは『慣れ親しんだ地元で生活をしたい』という希望でした。職場や通所先、病院だけではなく行きつけのお店やスーパーも本人にとっては離れがたいものです。そういった、いつもと変わらない日常を入居希望者が引き続き過ごすためには、GH 事業所や関係機関も含め、地域の人たちが支えているのだと実感しました。支援ワーカーの役割は、入居希望者をグループホームに繋げるだけではなく、地域の人たちへ繋ぐ架け橋にもなるのだと感じます。

私自身、頼りない部分もあるかと思いますが、今後も経験と知識を高めていき、GH 事業に関わる皆様、入居者・入居希望者に寄り添った支援ができるように頑張っていきたいです。

海匝圏域障害者グループホーム等支援ワーカー　鈴木佑佳

海匝圏域概況（令和 4 年 10 月 31 日現在）
事業所数：14 事業所　定員 267 名　ホーム 69 住居（サテライト型 3 住居）

◆編集後記　千葉県障害者グループホーム等支援事業が創設された当時の元千葉県知事堂本暁子さんにお会いし、当時の話をお聴きできたことは、とても幸運でした。タウンミーティングを通して小さな小さな声を救い上げてくださったお陰で私たち障害者グループホーム等支援ワーカーは、多くの障害ある方々から「ありがとう」のご褒美をいただいています。一方、当時「障害者グループホームのありかた研究会」で議論されたことが、今でも課題として積み残されていることを知る機会にもなり、「障害者グループホーム等支援事業は、まだまだ道半ば」であること、「まだまだやることが沢山あること」を痛感しました。　感謝、感謝、大感謝です。

発行者
千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会
編集担当
長生・夷隅圏域障害者グループホーム等支援ワーカー　金沢千絵
事務局　香取圏域障害者グループホーム等支援ワーカー香取市高萩1100－2（社会福祉法人ロザリオの聖母会　香取障害者支援センター内）